



Title	高句麗王朱蒙の名前に関する考察
Author(s)	梁, 紅梅; LIANG, Hongmei
Citation	北方言語研究, 13, 101-118
Issue Date	2023-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/106652
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/89071
Type	departmental bulletin paper
File Information	06_Liang.pdf



高句麗王朱蒙の名前に関する考察

梁 紅 梅
(東京大学大学院)

キーワード: 名前の表記、高句麗語、音韻論的特徴、意味分析、アルタイ諸言語

1. はじめに

1.1 研究目的

本稿では高句麗王朱蒙の名前の異表記に関して音韻解釈と意味解釈を試みる。高句麗国の始祖の名は朱蒙として広く知られているが、『三国史記』によると朱蒙王の在位年は紀元前 37～紀元前 19 年である(早乙女雅博 2005)。朱蒙王に関する記録は『漢書』、『魏書』、『魏志』、『後漢書』、『三国史記』、『三国遺事』、『日本書紀』などの中国、韓国、日本の歴史文献や「広開土王碑文」、「牟頭婁墓誌」などの碑文と墓誌に現れる。これらの資料は全て漢字で書かれているが、朱蒙王の名前に関しては多数の表記が現れた。いろいろな名前が観察されるが、本稿で言及する場合には「朱蒙王」に統一する。

本稿では各文献の記録から朱蒙王と関連する名前を抽出し、高句麗人の名前の特徴から姓の有無を議論した上で、中国音韻史学で再構された上古音と中古音¹の音価に基づき²、実際に高句麗語において使用されていた朱蒙王の名前の発音を再構することを目的とする。尚、朱蒙王の名前は語彙の意味がはっきり書かれた数少ない高句麗語でもあるが、本稿では中世モンゴル語³と比較して新たな意味解釈を試みる。

1.2 名前の異表記の一覧表

本稿で扱った研究資料には中国、朝鮮半島、日本で書かれた歴史文献と高句麗国で作られたと推定される碑文と墓誌などがある。次の一覧表は朱蒙王の名前に関する表記とその表記が書かれた代表的文献を年代順に並べたものである。

¹ 王力(2012)では紀元 3 世紀以前を上古期、4 世紀から 12 世紀を中古期、13 世紀から 19 世紀を近代、20 世紀を現代と分類している。

² 上古音の推定音価は議論が多いが、本稿では王力(2017、この本は 1985 年の単行本を底本としている)を参考にして、郭錫良(2017、初版は 2010 年)と鄭張尚芳(2003)の推定音価を提示する。中古音の推定音価は王力(2017)、郭錫良(2017)、平山久雄(1967)、伊藤智ゆき(2007)を参考にした。伊藤智ゆき(2007)の中古音の推定音価は基本的に平山久雄(1967)を参照している。

³ 李基文(1991:324)は「高句麗語はアルタイ系言語の要素をもっている。モンゴル語、トルコ語などに見える特徴を高句麗語にも見ることができる」(本稿筆者が韓国語から和訳)としている。

表記	出典	撰者／ 立てた者	編纂年代／ 立てられた時期	巻／ 面・行・列 ⁴
驪 ⁵	『漢書』	班固	76 年~83 年 ⁶	巻 99
鄒牟王	「広開土王碑文」	長寿王	414 年 ⁷	第 1 面 1 列目
鄒 ⁸ 牟	「牟頭婁墓誌」	牟頭婁の子孫	長寿王代前半期 ごろ ⁹	3 行目
鄒牟王	「集安高句麗碑文」	広開土王	広開土王碑より 早い ¹⁰	1 列目
朱蒙	『魏書』	魏収	559 年	巻 100
仲牟王	『日本書紀』	舍人親王ら	養老 4 年の 720 年	巻 27
都慕王	『続日本紀』	藤原継縄ほか	797 年(延暦 16)	巻 40
都慕王、 鄒牟王、 須牟祁王	『新撰姓氏録』	嵯峨天皇の命 により編纂	815 年(弘仁 6 年)	巻 22、巻 24、 巻 28、巻 30
朱蒙、鄒、 象解	『三国史記』	金富軾	1145 年	巻 6、巻 13、 巻 23
朱蒙	『三国遺事』	一然	1281 年~1289 年 ¹¹	巻 1

2. 朱蒙王の名前に関する文献上の記録

1.2 の一覧表で示したように、朱蒙王の名前は文献により多数の異なる表記で現れる。具体例について、記録された代表的資料の年代順にあげると以下の通りである¹²。

a. 「州郡歸咎於高句驪侯驪」

『漢書 卷九十九中 王莽伝 第六十九中』¹³

〔州郡は高句麗侯驪にその罪をさせた。〕

⁴ 朱蒙王の名前が記録された文献の巻数字と、碑文・墓誌の面・行・列を表す。

⁵ 「驪」は早乙女雅博先生のご教示により、「広開土王碑文」の鄒と同音であることから朱蒙と同じ人物だと判断し、一覧に含めた。

⁶ 本田済(1968)を参照した。

⁷ 武田幸男(2007)によると広開土王碑は 414 年に高句麗の広開土王の事績を後世に示すために立てられた石碑である。

⁸ 「鄒」は武田幸男(1989)が推測して判読した文字である。

⁹ 武田幸男(1989:349)によれば「長寿王代の、おそらく前半期ごろ、牟頭婁の死に際し、彼の子孫が…書き残した」ものであるという。

¹⁰ 集安博物館編(2013:122)によれば「集安高句麗碑」は広開土王がその父親のために建てたもので、広開土王碑より早くに建てられた。「牟頭婁墓誌」は「広開土王碑」と同じ時期に建てられたと推定される。

¹¹ 三品彰英遺撰(1975:13)によれば「…少なくとも忠烈王七年(元世祖の至元十八年・西紀一二八一)から示寂の忠烈王十五年(一二八九)までの間に行われたもので、一然の晩年の作に属するのである」という。

¹² 池内宏(1951)などの研究では朱蒙と東明という人物が同じ人か否かをめぐって議論になっているが、本稿では文献に記録された朱蒙王に関する表記だけを研究対象にし、東明は名前の範疇に入れないことにする。

¹³ 『漢書』の訳は小竹武夫(2010)を参照した。

これと関連する記録は『三国史記』にもある。

「王莽不聴…尤誘我將延不斬之…兩漢書及南北書皆云誘句麗侯驕斬之。」
『三国史記 卷 13 麗紀 1 瑠璃』
〔王莽は聞き入れず、尤に命じて撃たせた。尤はわが將軍の延丕を誘い出し、これを斬った…『漢書』『後漢書』『南史』『北史』などでは、みな「句麗侯の驕を誘い出し、これを斬った」としている。〕¹⁴

b. 「惟昔始祖鄒牟王之創基也。」「広開土王碑文」¹⁵
〔惟れ、はるか昔むかしに、始祖の鄒牟王が基礎を創った国である。〕

c. 「高句麗者、出於夫餘、自言先祖朱蒙…其俗言朱蒙者善射也。」
『魏書 卷 100 列伝 88』
〔高句麗は夫餘から分かれ出た。自分たちの先祖は朱蒙だと言っている。〕¹⁶

d. 「高麗仲牟王、初建国時、欲治千歳也。」
『日本書紀 天智天皇 7 年 10 月 卷 27』¹⁷
〔高麗の仲牟王は、建国の初めに、千年を治めようとした。〕

e. 「百濟太祖都慕大王者」『続日本紀 卷 40 三十』
〔百濟の大祖都慕大王〕¹⁸

f. 「百濟伎:出自百濟国都慕王孫徳佐王也。」
『新撰姓氏録 24 卷 右京諸蕃下 百二十五』
〔百濟伎は百濟国の都慕王の孫の徳佐王の子孫である。〕¹⁹

g. 「長背連:出自高麗国主鄒牟。」『新撰姓氏録 24 卷 右京諸蕃下 百二十九』
〔長背連は高句麗国の鄒牟王からなる。〕

h. 「狛染部:高麗国須牟祁王之後也。」
『新撰姓氏録 30 卷 未定雑姓河内国 百六十二』
〔狛染部は高麗国の須牟祁王の子孫である。〕

¹⁴ 『三国史記』の訳は井上秀雄(1983)を参照した。

¹⁵ 「広開土王碑文」の釈文は武田幸男(2007)を参照した。

¹⁶ 『魏書』の訳は井上秀雄他訳注(2006)を参照した。

¹⁷ 『日本書紀』の原文と訳は坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校(1974)を参照した。

¹⁸ 『続日本紀』の原文と訳は青木和夫ほか(1998)を参照した。

¹⁹ 『新撰姓氏録』の訳は佐伯有清(1983)を参照した。

- i. 「始祖東明聖王姓高氏諱朱蒙一云鄒■²⁰ 一云象解。」『三国史記 卷13 麗紀 始祖』
〔始祖東明聖王は姓が高氏で諱は朱蒙といい、一名は鄒■、一名は象解という。〕
- j. 「新羅王致命高句麗嗣子安勝公太祖中牟王積德比山…」
『三国史記 卷6 羅紀6 文武』
〔新羅王は高句麗嗣子の安勝公を高句麗王に冊命する。太祖の中牟王は徳を山のように積み…〕
- k. 「東明聖帝姓言氏諱朱蒙。」『三国遺事 卷1 紀異 高句麗』
〔東明聖王は姓が言氏で諱を朱蒙と言う。〕²¹
- l. 「第一東明王…姓高名朱蒙一作鄒蒙壇君之子。」『三国遺事 卷1 王曆』
〔第一東明王は…姓が高で名を朱蒙と言い、一名鄒蒙と言い、壇君の子である。〕

後漢の班固(32～92)によって書かれた a の『漢書』に「騶」という名前で高句麗侯が登場する。これは朱蒙王の名前に関する一番早い記録でもあった。一方、『三国史記』の注釈の「両漢書及南北書皆云誘句麗侯騶斬之。」の記録では「騶」の文字が使われているが、『漢書』、『後漢書』²²でともに「騶」の表記が使われたことからすると、「騶」は誤字の可能性が高いと思われる。騶の中古音²³は見麻合二平佳仮 [kwa]、上古音は 見母 歌部 [koa]²⁴ であり、「騶」の中古音は莊尤開三平流 [tʂiəu]、上古音は 莊母 侯部 [ʈʂio]²⁵ であるため、「騶」と「騶」の音の関連性は見えにくい。ただし後述(3.6)のように、「騶」の上古音の音価は「解」と類似している点が注目される。

高句麗人による記録に b の「広開土王碑文」がある。「広開土王碑文」には「鄒牟」という表記が使われている。その他「集安高句麗碑」と「牟頭婁墓誌」も高句麗人によって作られたものであるが、「集安高句麗碑」は広開土王がその父親のために建てたもので、広開土王碑より早くに建てられている(集安博物館編著 2013)。「牟頭婁墓誌」は「広開土王碑」と同じく長寿王の時代に建てられたと推定される(武田幸男 1989:349)。「集安高句麗碑」、「牟頭婁墓誌」とともに「鄒牟」という表記が使われている。

²⁰ 『三国史記』では鄒の後ろの文字が消されて■になっているが、『三国史記』鈔字本では鄒の次は空白になっている。

²¹ 『三国遺事』の訳は三品彰英遺撰(1975)を参照した。

²² 『後漢書』巻115 列傳第75の東夷の東夷傳では「州郡歸咎於高句麗侯騶」の記録がある。

²³ 中古音は郭錫良(2017)を参照し、声母、韻類、開合、等、声調、韻攝、音声記号の順に示す。上古音の音価は郭錫良(2017)と鄭張尚芳(2003)を参照し、声母と韻部、音声記号を示す。

²⁴ [koa]は郭錫良(2017)の推定音価であり、鄭張尚芳(2003)の推定音価は𪛗声 歌部 [krool]である。

²⁵ [ʈʂio]は郭錫良(2017)の推定音価であり、鄭張尚芳(2003)の推定音価は𪛗声 幽部 [ʈʂru]である。

「□□□□世必授天道自承元王始祖鄒牟王之創基也²⁶」「集安高句麗碑」²⁷
 「□□□□始祖の鄒牟王の創基にかかるものであり、代々その子孫によって王位が
 継承された。」²⁸

「河泊之孫日月之子鄒²⁹牟」「牟頭婁塚墓誌」³⁰
 「河泊の孫、日月の子の鄒牟」

『漢書』に現れる「騶」とこれらの「鄒」は中古音と上古音の音価が一致する。中古音：
 鄒:鄒小韻 側鳩切 莊尤開三平流 tʃiəu、上古音: 莊母 侯部 ʃio(郭)／騶声 幽部 ʔsru(鄭)³¹。
 「騶」は『漢書』(76-83年)に現れるため、時代性を考慮して上古音として処理すべきであ
 る。

よく知られる「朱蒙」の表記は c の『魏書』に初めて登場する。i の『三国史記』、f の
 『三国遺事』にも朱蒙の表記が使われている。k の『三国遺事』王暦篇では「朱蒙一作鄒蒙」
 と書いてある。末松保和(1963)によれば、『三国遺事』王暦篇はもと独立した一書であった
 が、便宜上、『三国遺事』の一部分として後からつけ加えられたという。『三国史記』には「朱
 蒙」の他に「鄒、象解、中牟王」の表記もみられる。『三国史記』の高句麗紀と新羅紀で違
 う表記が使われているのは、編纂当時の参照文献の違いによるものと考えられる。

日本の文献では、d の『日本書紀』に「仲牟王」が登場する。「仲」の中古音の音価は j の
 『三国史記』羅紀の「中牟王」の「中」と類似する(後述)。

e の『続日本紀』と f の『新撰姓氏録』では、百済国の太祖として「都慕王」が登場す
 る。『新撰姓氏録』には他にも「都慕王」に関連する記録がある。

「和朝臣:出自百済国都慕王十八世孫武寧王也。」
 『新撰姓氏録 22 卷 左京諸蕃下 百十四』
 「和朝臣は百済国の都慕王の十八世孫の武寧王から出た。」

「百済朝臣:出自百済国都慕王三十世孫惠王也。」
 『新撰姓氏録 22 卷 左京諸蕃下 百十四』
 「和朝臣は百済国の都慕王の卅世孫の惠王から出た。」

「百済公:出自百済国都慕王廿四世孫汶淵也。」
 『新撰姓氏録 22 卷 左京諸蕃下 百十四』
 「百済公は百済国の都慕王の廿四世孫の汶淵から出た。」

²⁶ 石碑の欠損などにより漢字が失われた部分は□で表示する。

²⁷ 集安高句麗碑の釋文は集安市博物館編著(2013)を参照した。

²⁸ 「集安高句麗碑文」の訳は荊木美行(2015)を参照した。

²⁹ □内の文字は武田幸男(1989)が推測して判読した文字である。

³⁰ 「牟頭婁塚墓誌」の釈文と訳は武田幸男(1989)を参照した。

³¹ 以下上古音に関して、郭は郭錫良(2017)、鄭は鄭張尚芳(2003)の推定音価を指す。

「菅野朝臣:出自百済国都慕王十世孫貴首王也。」
『新撰姓氏録 24 卷 右京諸蕃下 百二十四』
〔菅野朝臣は百済国の都慕王の十世孫の貴首王から出た。〕

「高原宿祢:本同都慕王十世孫貴首王之後也。」
『新撰姓氏録 24 卷 右京諸蕃下 百二十四』
〔高原宿祢:都慕王の十世孫の貴首王の子孫である。〕

「不破連:出自百済国都慕王孫毘王王也。」
『新撰姓氏録 24 卷 右京諸蕃下 百二十六』
〔不破連は百済国の都慕王の子孫の毘王から出た。〕

「河内連:出自百済国都慕王男陰太貴首王也。」
『新撰姓氏録 右 28 卷 河内国諸蕃 百四十六』
〔河内連は百済国の都慕王の男陰太の貴首王から出た。〕

このように、『新撰姓氏録』には都慕王に関する記録が全部で 8 つある。百済国都慕王に関しては『三国史記』百済紀に「百済始祖温祚王其父鄒牟或云朱蒙…」の記録があるため、『続日本紀』と『新撰姓氏録』の百済太祖の都慕王は朱蒙王と同じ人物だと考えられる。日本の記録に登場する「都慕王」という名称は、百済国に関してのみ使用されている。

『新撰姓氏録』には他にも g の「鄒牟」と h の「須牟祁王」の表記が見られる。「須牟祁王」に関しては、以下のように『新撰姓氏録』の狛人の条にも記録がある。

「狛人:高麗国須牟祁王之後也。」
『新撰姓氏録 右 30 卷 未定雑姓河内国 百六十二』
〔狛人は高麗国の須牟祁王の子孫である。〕

以上の文献では、「騶、鄒牟王、朱蒙、鄒蒙、仲牟王、都慕王、須牟祁王、象解」などの漢字を用いて朱蒙王の名前が記録されているが、漢字の特徴からみると、文献が書かれた国の言葉の特徴をよく表していることがわかる。象解は音韻論的特徴から朱蒙の系列の言葉と直接関係はないが、特別な意味を持っている語彙だと考えられる。

3. 朱蒙王の名前の特徴

3 節では朱蒙王の名前の表記に関して、姓氏、名前の第一音節の表記、第二音節と第三音節の表記、語彙の音韻構造の特徴、名前の意味と比較研究、象解に分けて考察を行い、実際の高句麗語による発音の再構を試みる。

3.1 姓氏

姓に関して鮎貝房之進(1973:72)は「句麗族は無姓氏たりしを推知さる」とするが、本稿でも同じ考えである。以下資料の姓氏に関する記録を詳しく見ながらその理由を説明する。

『魏書』と『三国史記』では高氏、『三国遺事』では言氏、高氏、解氏との記録が見られる。

「與朱蒙至紇升骨城，遂居焉，號曰高句麗，因以為氏焉。」

『魏書 卷 100 列伝 88』

〔朱蒙と紇升骨城に至って住んだ。国号を高句麗としたのでそれを姓氏にした。〕

「始祖東明聖王姓高氏諱朱蒙…。」『三国史記 卷 13 麗紀 1 始祖』

〔始祖東明聖王は姓高氏で諱は朱蒙である。〕

「国号高句麗因以高為氏本姓解也今自言是天帝之子承日光而生故自以高為氏。」

『三国遺事 卷 1 紀異 高句麗』

〔国号を高句麗としたので高を氏にした。本姓は解である。今自ら天帝の子で日光を浴びて生まれたので高を氏とすると言っている。〕

「東明王姓高氏名朱蒙本姓解。」『東藩紀要 卷 10 五』

〔東明王は姓が高氏で名は朱蒙、本姓は解である。〕

『三国史記』では姓を高氏とする。『三国遺事』で高氏は高句麗国の国号からとったとするが、三品彰英(1975)は「句麗王が高氏を称したとする初見は…高璉(長壽王)である。…高句麗王が高氏を称したのは北燕王の高氏に由来するもので高句麗の高を取ったものではない」と指摘している。朱蒙王に関して姓氏が記録された一番古い記録は『魏書』である。

「與朱蒙至紇升骨城，遂居焉，號曰高句麗，因以為氏焉。」

『魏書 卷 100 列伝 88』

〔朱蒙と紇升骨城に至って住んで国号を高句麗としたのでそれを姓氏にした。〕

末松保和(1966)によれば、『三国史記』は『魏書』を参考にして書かれたという。

高氏の他、『三国遺事』と『東藩紀要』では本姓を解氏とした。初期の扶余と高句麗国の王は解氏を冠する名前が多い。『三国史記』の記録によれば、第四代の閔中王は名前が「解色朱」で、第五代王の慕本王は「解憂」であった。「広開土王碑文」の「惟昔始祖鄒牟王之創基也出自北夫餘」の記録から、鄒牟王は北扶余の人だったと解釈できるが、父の名が解慕漱で、扶余族の初期の王が解夫妻であることを考慮すると、朱蒙王の本姓が解氏だとするのは必然だといえる。

『三国遺事』では、解氏と高氏以外に言氏も登場する。

「東明聖帝姓言氏諱朱蒙」『三国遺事 卷1 紀異 高句麗』
[東明聖王の姓は言氏で諱は朱蒙である。]

朱蒙王の姓が言氏として記録されたのは『三国遺事』「卷1 紀異 高句麗」だけであるが、同じ張には姓が高という記録もある。三品彰英(1975)は「麗紀」でも姓高氏であり、『三国遺事』での言は高の誤写である」と指摘している。李丙壽(2012)でも言氏を高氏に訂正している。

以上の記録から、高句麗始祖の朱蒙は高氏、解氏、言氏の姓をもっていた可能性はあるが、歴史事実から高句麗の初期の人たちは姓をもっていなかったことがわかる。『三国史記』高句麗紀に、初期に王から姓が贈られた記録があるためである。

「朱蒙賜再思姓克氏武骨仲室氏黙居少室氏…遇此三賢豈非天賜乎。」
『三国史記 卷13 麗紀1 始祖』
[朱蒙は再思に克氏という姓を与え、武骨には仲室氏、黙居には少室氏の姓を与えた。…この三人の賢者に遭うことができたが、どうして天の賜りものではないと言えましょうか。]

朱蒙王が三人の家臣に克氏、仲室氏、少室氏の姓を与えたとする。瑠璃明王の時にも王から姓を賜ったという記録がある。これらのことから、早い時期の高句麗の民衆は姓を持っていなかったことがわかる。朱蒙王の高氏、解氏、言氏姓は何らかの象徴として、名の前に(後から)付けられたものだと思われる。「解」の意味分析に関しては3.6で議論する。

3.2 名前の第一音節の表記

朱蒙王の名前の第一音節には「騶、鄒、朱、仲、中、都、須」の表記が使われている。第一音節に使われた表記の中古音と上古音の音価は次のとおりである。

中古音

鄒:鄒小韻 側鳩切 莊尤開三平流 ʃiəu;
朱:朱小韻 章俱切 章虞合三平遇 teiʉ;
仲:仲小韻 直衆切 澄送合三去通 dʒiʉŋ;
中:中小韻 陟弓切 知東合三平通 tʃiʉŋ;
中小韻 陟仲切 知送合三去通 tʃiʉŋ;
都:都小韻 當孤切 端模合一平遇 tu;
須:須小韻 相兪切 心虞合三平遇 sʃiʉ

上古音³²

騶:莊母 侯部 ʃio(郭)/𪛗声 幽部 ?sru(鄭);

³² 郭は郭錫良(2017)、鄭は鄭張尚芳(2003)の推定音価を指す。

鄒:莊母 侯部 ʃio(郭)／弼声 幽部 ʔsru(鄭);
 朱:章母 侯部 iwo(郭)／朱声 侯部 tjo(鄭);
 仲:定母 冬部 diwəm(郭)／中声 終部 duŋs(鄭);
 中:端母 冬部 tiwəm(郭)／中声 終部 tuŋ、tuŋs(鄭);
 都:端母 魚部 ta(郭)／者声 魚部 ta:(鄭);
 須:心母 侯部 siwo(郭)／須声 侯部 so(鄭)

第一音節の頭子音[te], [ʃ], [t], [t], [s]は舌頂音の無気無声音であり、主母音は[u]である。「仲」の[d]のみ例外的に無気有声音である。子音に有気音が見られないのは、高句麗語は韓国語のように有気音の発達が一番遅かった³³ことにつながるかもしれない³⁴。

「騶」は『漢書』に現れるが、『漢書』が書かれた時期は上古音に分類される。「騶」の上古音は莊母 侯部 ʃio(郭)／弼声 幽部 ʔsru(鄭)である。王力(1980)は上古の侯部の音価は[o]だが、これはもっと狭い [u]に近かったとした。「騶」の中古音は莊尤開三平流[tɕiəu]で、「騶」と「鄒」は上古音・中古音で同音である。もし高句麗人が碑文を書くときに『漢書』の記録を参照していたのであれば、始祖王の名前としてよりふさわしい(馬偏を持つ騶よりは適切だったと思われる)「鄒」を選択したと考えられる。

「朱」は『魏書』に初めて現れ、中古音は[tɕiu]である。「朱」は漢人の姓に近く、発音からみても適切なものであったと考えられる。

「仲、都、須」の表記は日本の文献に現れたものだが、日本漢字音の呉音³⁵では、「仲」がチュウ、「都」がツ、「須」がスである。

『日本書紀』には高句麗の「泉蓋蘇文」という人物を「伊梨柯須彌」と表記した。

「秋九月、大臣伊梨柯須彌弑大王…。」『日本書紀 皇極天皇元年 卷 24』

〔秋の九月に大臣の伊梨柯須彌が大王を殺した…。〕

「蓋蘇文或云蓋金姓泉氏…」『三国史記 卷 49 列伝 9 蓋蘇文』

〔蓋蘇文或いは蓋金は姓が泉氏であり…〕

『日本書紀』の「伊梨柯須彌」は池内宏(1960)などによれば「泉蓋蘇文」と同じ人物である。「柯須彌」は「蓋蘇文」の音訳だが、高句麗語の「蘇」は日本語では「須」に対応した。

「蘇」の中古音は 蘇小韻 素姑切 心模合一平遇 su;上古音は心母 魚部 sa(郭)／魚声 魚部 sŋaa(鄭)であった。つまり、高句麗語の「鄒」と「蘇」は日本語では「須」の発音に読まれていたことがわかる。日本の呉音からすると、ʃ/s>s; ʃ>ts の音韻変化を辿ったと考えられるが、小倉(1998)によれば上代日本語のサ行音の発音については破擦音・摩擦音などの説があり、タ行音に関しても実際にどのように読まれていたのかははっきりしないことから、それらの分析については今後の課題とする。

³³ 李基文(2004:81)によれば韓国語では有声音と無声音が合流してから、有気音が発達したとした。

³⁴ 梁紅梅(2019)で言及したように、高句麗語では有気音が非常に少なかった。

³⁵ 旺文社『標準漢和辞典』(1981)による。

文献上の記録から見ると、騶と鄒が一番古い形である。これらの表記の中古音は母音が全部合口³⁶で [u] が主母音である。上古音は [o] と [u] が混ざっているが、王力(1980)で言及したようにこの二つの母音は近い音であった。

以上、名前の表記の第一音節の特徴を見るとこれらの表記は発音部位が近く、主母音も一致しているので、同じ高句麗語に対する類音異体字だと言える。

朱蒙王の第一音節の高句麗語の音価は騶と鄒を考慮すると、[ɟʷu] に近いものだったと思われる。

3.3 名前の第二、三音節の表記

朱蒙王の名前の第二、三音節の文字には「牟、蒙、慕、牟祁」が使われている。それぞれの中古音と上古音の音価は次のとおりである。

中古音

牟:謀小韻 莫浮切 明尤開三平流 mǎu;
蒙:蒙小韻 莫紅切 明東合一平通 mǒuŋ;
慕:莫故切 明暮合一去遇 mu;
祁:渠脂切 羣脂開三平止 gi

上古音

牟:明母 幽部 mǎu(郭)/牟声 幽部 mu(鄭);
蒙:明母 東部 mǒŋ(郭)/冡声 東部 moon(鄭);
慕:明母 鐸部 māk(郭)/莫声 暮部 maags(鄭);
祁:羣母 脂部 giei(郭)/示声 油部 gril(鄭)

「牟、蒙、慕」の3字は中古音では頭子音の[m-]と主母音の[u]が一致する。

『漢書』では「高句麗侯騶」のように第一音節のみになっている。『三国史記』において、「始祖東明聖王姓高氏諱朱蒙一云鄒■」のように鄒の後ろが消されているのは、『漢書』を参照した証拠と言えるかもしれない。

『広開土王碑文』では「惟昔始祖鄒牟王之創基也」と書かれており、第二音節に「牟」が使われている。日本の文献には牟、慕、牟祁が使われた。牟の上古音は明母 幽部 mǎu(郭)/牟声 幽部 mu(鄭)である。日本語の呉音³⁷で牟はム、慕はモ、祁はギである³⁸。牟、蒙、慕、牟祁を比べてみると、中古音での牟祁は mǎu+gi の組み合わせで、蒙の mǒuŋ に近い音になる可能性は十分ある。つまり mǒuŋ > mǎu+gi になったと考えられる。『漢書』では「騶」の文字のみだったが、本稿では高句麗人が碑文に記録したことを考慮して第二音節を[mǎu]、

³⁶ 平山久雄(1967:131)によると「介音として -u- 類の音を含む場合を<合口>、それを含まない場合を<開口>と呼び、それらの区別を<開・合>と呼ぶとした。」

³⁷ 旺文社『標準漢和辞典』(1981)による。

³⁸ 清瀬義三郎則府(1989)によれば、上代日本語には甲類と乙類に分けて8母音説もあるが、いまだに議論が多いことからこちらの表記の上代日本語の発音に関しては今後の課題とする。

あるいは[mu]であると再構する。

3.4 語彙の音韻構造の特徴

朱蒙王の名前の表記は『漢書』の「騶」の他に、多音節になっているものがある。

日本の文献で現れた「鄒牟、仲牟、都慕、須牟祁」の表記に関しては、「鄒牟」が高句麗国に関する記録の中で現れたことから当時の高句麗の影響、「仲牟」が中牟と発音と表記が類似していることから新羅の影響、「都慕」が百済国に関連する人物のみ使われたことから百済の影響、「須牟祁」が牟祁と蒙の発音が類似することから中国文献の影響によるものと言えるかも知れない。ただ、これは表記された文字の関連性を考慮した結果であり、音韻論的に上代日本語で都と須、牟祁がどのような発音だったかをはっきりしないと正確な結論は出しにくいところである。

朱蒙王の名前に関する表記では中古音の音声記号からみると、第一音節と第二音節はほぼ同じ主母音の[-u]をもっている。上古音の音声記号では[o]、[u]、[ə]、[a]の多様な母音が見られるが、第一音節と第二音節では同じ母音が現れた。

各表記に使われた漢字の小韻³⁹は全てその韻の中での代表字である。『切韻』系韻書で各文字の所属位置をみると、「騶」と「鄒」は鄒小韻、「朱」は朱小韻、「中」は中小韻、「仲」は仲小韻、「都」は都小韻、「須」は須小韻の中に書かれた文字であり、比較的よく知られている文字を使う傾向があったと言える。

朱蒙王の名前は高句麗語では[ʃju miəu]、あるいは[ʃju mu]だったと思われる。

3.5 名前の意味と比較研究

高句麗語には意味がはっきり知られている語彙が非常に少ないが、朱蒙は意味がわかる人名として、貴重な一例である。その意味に書かれた一番早い記録は『魏書』である。

「高句麗者，出於夫餘，自言先祖朱蒙…其俗言朱蒙者善射也。」

『魏書 卷 100 列伝 88』

「扶餘俗語善射為朱蒙。」『三国史記 卷 13 麗紀 1 始祖』

〔扶余の方言では、弓射が上手なことを朱蒙という。〕

朱蒙王の名前に関しては、満州語、契丹語などとの比較研究が行われている。代表的な先行研究に、白鳥庫吉(1970)、三品彰英(1975)、井上秀雄(1983)などがある。白鳥庫吉(1970:158)は「契丹語好を奢という…この奢及び捨は同語(契丹語)の異訳で朝鮮語善・好の義を含んで居る cho と関係ある語に相違ない。依って考えるのに高句麗語朱蒙の朱は今の韓語 cho の音訳で契丹語捨・奢と同じ語系をひくものではあるまいか。而して韓語チョー、契丹語捨は今の満州蒙古語 sain と連絡ある言であらう。」とする。三品彰英(1975:389)は、『満州源流考』巻一部では「按今満州語。称善射者謂之卓琳莽阿。卓與朱音相近。琳即齒舌之余韻也。莽阿

³⁹ 小韻は中古音で同音文字のグループを言うが、同じ韻目の最初の文字を代表字という。

二字急呼之音近蒙。是伝写雖訛。音解猶有可考也。」という説を音の類似説が俗解的に朱蒙善射説を導き出したものであろうか」としたうえで、語義に関しては「満州朝廷の祭祀儀礼に建てられる神竿が祖宗竿、索摩竿と呼ばれているが、索摩 soma は神霊、祖霊を意味する語らしく、また朱蒙と同語だと考えられる。とすれば朱蒙は本来神霊ないし祖霊を読んだものと解される。」と解釈した。井上秀雄(1983:24)は「朱蒙の原義には善射説が有力だが、神・王の古語説、神霊ないし祖霊説もある」とした。

まず、白鳥庫吉(1970)は朝鮮語 cho と関係あるとしたが、おそらく朝鮮語で「良い」を意味する송-を指している。朝鮮語の cjoh-⁴⁰は 15 世紀の文献では tjoh で現れている。第一音節の朱が好の意味を持つとすれば、蒙が射の意味を持つことになるが、蒙と射の関連性は示されていない。三品彰英(1975)は満州語の索摩 soma と同語にして神霊説を唱えた。井上秀雄(1983)は各説をまとめた。本稿では文献記録から、善射という意味を持つモンゴル語との比較を試した。

朱蒙という語彙が善射という意味を持つことは『三国史記』をはじめとするさまざまな文献に記録されている。李基文(2004:21)では「アルタイ語族にはトルコ諸語、モンゴル諸語、ツング-ス諸語が含まれている」とした上で「高句麗語はアルタイ語の要素を持っていた。」とした(本稿筆者が韓国語から和訳)。モンゴル語には、箭と善射という語彙がある。『元朝秘史』⁴¹には箭の発音を「速木」で表記しており、これを白鳥庫吉(1942:25)はこれをローマ字で sumu と転写している。また『蒙語類解』では箭을저머(cjebe)、火箭을수무(sumu)にし、一中⁴²も수무(sumu)と転写している。他に『蒙語類解』⁴³では善射을할부훈(harbuchun)、커쳐국(k^h ec^hieguk)と転写している。『華夷訳語』⁴⁴(1382)の韃靼訳語に「箭 速木 木作門」と書かれている。中古音で「速」は「桑谷切 速小韻 心屋合一入通 suk」;「木」は「莫卜切 木小韻 明屋合一入通 muk」;「門」は「莫奔切 明魂合一平臻 muən」となる。これらは第一音節の頭子音が舌頂音の摩擦音／破擦音で主母音は[-u]、第二音節の頭子音が唇音[m]で主母音は[-u]であるため、朱蒙の[ʃju miəu]、あるいは[ʃju mu]と比較してみても差し支えないと思われる。「木、門」の末子音 k/g はそれぞれ「須牟祁」の「祁」に対応するものか、-ŋ にあたるものかもしれない。

朱蒙王の名前の語源に関しては、先行研究において、韓国語との比較、アルタイ系諸語との比較などを通し多くの仮説が立てられている。高句麗語とモンゴル語を同系統の言語とみて共通の祖語における語源をもっていると考えると、善射の意味から、朱蒙王の名前はモンゴル語の sumu と語源が最も近いのではないかと考えられる。

⁴⁰ 以下韓国語の転写法は福井玲(2013)を参照した。

⁴¹ 栗林均(2003a)によれば原本は伝わっておらず、現存するものは 14 世紀後半「漢字音訳本」である。13、14 世紀のモンゴル語を知る上で重要な資料である。

⁴² 一回目で命中したという意味だと考えられる。

⁴³ 小沢重男(1961)によれば 1768 年に編せられたもので、18 世紀中葉モンゴル語文語広くは口語を知るうえで価値は大きい。

⁴⁴ 栗林均(2003b)によれば 1389 年に刊行されたが、モンゴル語を漢字音訳する方式、および例文の体裁は『元朝秘史』に極めて類似している。

3.6 象解⁴⁵

朱蒙王には象解という名前もある。『三国史記』では高句麗国の初期の王として朱蒙(一云)鄒牟(一云)象解、類利(或云)孺留、解憂(一云)解愛婁、宮(小名)於漱、男武(或云)伊夷謨、延優(一名)位宮…のように一云、或云を使って別名が書かれていた。それらの中には朱蒙(一云)鄒牟のように音価に近いものもあれば、宮(小名)於漱のように音の関連がないものもある。

「始祖東明聖王姓高氏諱朱蒙一云鄒■一云象解」『三国史記 卷 13 麗紀 1 始祖』
 「始祖の東明聖王は姓を高氏と言ひ諱は朱蒙あるいは鄒■、あるいは象解と言う。」

象解の中古音⁴⁶の音価は次の通りである。

中古音

象:像小韻 徐兩切 邪養開三上宕 zīaŋ;

解:蟹小韻 佳買切 見蟹開二上蟹 kai;

解:解小韻 胡買切 匣蟹開二上蟹 ɣai

上古音

象:邪母 陽部 zīaŋ(郭)／象声 陽部 ljaŋʔ(鄭);

解:見母 錫部 kək(郭)／解声 支部 kreeʔ(鄭);

解:匣母 錫部 ɣək(郭)／解声 支部 krees(鄭)

象解は母音が開口の[-a]であり、朱蒙の系列の[-u]とは違って音韻的に関連性がないと思われる。「解」は鮎貝房之進(1973)、井上秀雄(1983)などによると韓国語の해[hai]と関連して太陽を表す。『鷄林類事』で「日日姁黒隘切⁴⁷」という記録から、当時の「日」は「姁」のように発音され、黒隘切だったことがわかる。黒隘切は黒が曉母、隘の音価は卦韻の[hai]のである。すなわち高麗時代の「日」は[hai]の音価を持っており、「解」の発音と近かった。上述のように「解」は象解、解夫妻、解慕漱、解明、解憂(一云)解愛婁、解色朱など、扶余の王と初期の高句麗の王の名前の第一音節によく用いられた。

「扶余王解夫妻老無子」『三国史記 卷 13 麗紀 1 始祖』
 「扶余王の解夫妻が年をとっても子がなかった。」

⁴⁵ 三品彰英(1975)と井上秀雄(1983)では衆解とした。

⁴⁶ 象解は『三国史記』の記録であるため、上古音は提示しない。

⁴⁷ 「日日姁黒隘切」は前間恭作(1925)を参考に直したものである。本来は「日日姁」、「月日契黒隘切」となっている。また姁は姁の間違いだとした。

「其旧都有人不知所從來自称天帝之子解慕漱來都焉。」

『三国史記 卷 13 麗紀 1 始祖』

〔扶餘国の旧都に、どこからやってきたかわからないが、天帝の子の解慕漱と自称する人が、都をひらいた。〕

「世子解明在於別都以好勇。」『三国史記 卷 13 麗紀 1 瑠璃』

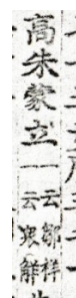
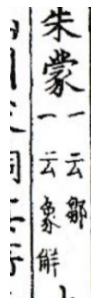
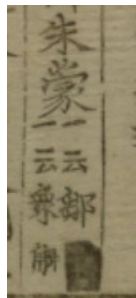
〔王太子の解明は、古都にいて力が強く、武勇を好んだ。〕

「始祖東明聖王姓高氏諱朱蒙一云鄒■一云象解」『三国史記 卷 13 麗紀 1 始祖』

〔始祖の東明聖王は姓を高氏と言い諱は朱蒙あるいは鄒■、あるいは象解と言う。〕

鮎貝房之進(1973:73)は「解氏は本々扶余の氏族名なるが…往昔国境無き時代は今の満州東南部と此の朝鮮とは言語の大同小異たりしこと…今の朝鮮語より推測するに「太陽」すなわち「日輪」の方言にあらざるかを思うものなり。」とした。解が名の前に使われたことが多いことから、姓として解釈することもできるが、「象解」では第二音節に現れていることをふまえ、本稿では少なくとも高句麗初期に解は姓ではなく何か意味を付与した高句麗語の語彙だと解釈したい。つまり「解」は姓ではないが、韓国語の해[hai]の発音と似ていることから、太陽の意味を持つ高句麗語だと考えられる。

「象解」に関しては第一音節の文字が「衆」であるという解釈がある。『三国史記』の二つの版本と『三国使節要』を比較すると、以下の通りである。



『三国史記』(1512 年版) 『三国史記』 鑄字本(1750 年版) 『三国使節要』(1476)

三品彰英(1975)、李丙壽(1977)、井上秀雄(1983)などでは「象」を誤字とみなし、「衆解」と直している。「衆」は「鄒」などの表記と発音が近いが、上の図でみられるように、『三国史記』 鑄字本の象解の解析度が一番鮮明である。『三国史記』は 1142 年に編纂されたものだが、現存する最古の板本が 1512 年慶州重刊本であって、それにつぐものが 1750 年の英祖朝中期(1750 年)以後印出と推定される鑄字本である⁴⁸。『三国使節要』の李昌世の解説(1973)によると、『三国使節要』は 1476 年に完成して、現存するものは同じ時代の印本だけある。

⁴⁸ 『三国史記』(1964)の末松保和の解説による。

本稿では『三国史記』鋳字本を元に「象解」として解釈した。

「象解」は第一音節、第二音節ともに開口で前舌母音 [-a] をもち、声調は上声であって、朱蒙の系列とは音韻系統が違ふ。上(2章)で『三国史記』の注釈に「駟」の表記があるが、歴史事実からおそらく誤字だと判断できるとした。ただし、鄭張尚芳(2003)の推定音価からすると「解」は声符「解」 支部 kre:ʔ (kre:s)であり、「駟」の推定音価は kro:l であって「駟」と「解」は上古音では共通の頭子音 kr-をもっていた可能性があるが、音の類似性だけでは「駟」と「解」の関連性は判断できないため本稿ではその可能性を示すにとどめておく。

4. 結論

本稿では各文献に記録された朱蒙王の名前に用いられた漢字を抽出して、音韻と意味の面から分析した。音韻分析では中古音と上古音を併用することで異表記の伝播経路なども解明することができた。朱蒙王の名前の特徴から、本稿では姓と第一音節、第二音節、音韻構造、意味の比較研究から分析を行った。

朱蒙王の名前に使われた漢字はバリエーションが多く、名前の第一音節には朱、鄒、都、駟、仲、中、須;第二、第三音節には牟、蒙、慕、牟祁があった。第一音節の子音の[te]、[tʃ]、[tʰ]、[t]、[s]は舌頂音の無気無声音であり、主母音は[-u]である。仲の[d]は有声無気音である。続く第二音節は子音が唇音[m]であり、母音はほぼ[-u]で一致していた。頭子音に有気音は現れなかった。

『漢書』での「駟」と「広開土王碑文」鄒牟の音価を考慮すると朱蒙王の名前は高句麗語では[ʃju miəu]、あるいは[ʃju mu]だったと思われる。

象解は朱蒙と同じ音韻グループではないが、扶余国と高句麗国の初期の王の名前に解が使われたことと、その発音が朝鮮語の太陽にあたる /hai/ と近いことから太陽の表意的な意味を持った語彙として解釈できる。

意味に関しては本稿では善射の意味と、モンゴル語で箭を速木(sumu)と読んだ記録から、朱蒙王の名前の表記と音価が似ていることに注目し、高句麗語とモンゴル語の共通の祖語における sumu と関係のある語であると推定した。

参考文献

<影印本>

『漢書』(1977) 東京:汲古書院.

『後漢書』(1977) 東京:汲古書院.

『魏書』(1974) 北斎 魏収撰 北京:中華書局.

『後漢書』(1977) 東京:汲古書院.

『三国志』(1975) 東京:汲古書院.

『三国史記』(1982) 朝鮮史学会(編) ソウル:ソウル影仁文化社.

『三国史記』(1964) 東京:学習院大学東洋文化研究所.

『三国史記奥付』(1986) 東京:学習院大学東洋文化研究所.

『三国使節要』(1973) ソウル:亜細亜文化社.

『国宝岩崎本日本書紀』京都国立博物館所蔵(2013) 東京:勉誠出版.

『続日本紀』 国立国会図書館デジタルコレクション. 続日本紀 40 巻 [20] 国立国会図書館デジタルコレクション (ndl.go.jp) 最終閲覧日:2023 年 1 月 25 日
『新撰姓氏録』(1812) 浪華:加賀屋善蔵.
『鶏林類事』(1974) 宋 孫穆 ソウル:大提閣.
『蒙語類解』(1985) ソウル:大提閣.
『元朝秘史(外四種)』(2008) 上海:上海古籍出版社.
『華夷訳語』(2010) ソウル:ソウル大学奎章閣韓国学研究院.
『東藩紀要』(1968) 台北:文海出版社.

<論文等>

(1)日本語で書かれたもの

青木和夫・稲岡耕二・笹山晴生・白藤禮幸(1998)『続日本紀』東京:岩波書店.
赤塚忠監修(1981)『標準漢和辞典』東京:旺文社.
鮎貝房之進(1973)『姓氏攷及族制攷・市廛攷』東京:国書刊行会.
池内宏(1951)『満鮮史研究』上世編 京都:祖国社.
伊藤智ゆき(2007)『朝鮮漢字音研究』東京:汲古書院.
井上秀雄訳注(1983)『三国史記 2』東京:平凡社.
井上秀雄他訳注(2006)『東アジア民族史 1』東京:平凡社.
荊木美行(2015)「吉林省集安市発見の高句麗碑について」『皇學館大学紀要』53:1-32.
小倉肇(1998)「さ行子音の歴史」『国語学』195:42-55.
小沢重男(1961)「中・韓・蒙・対訳語彙集「蒙語類解の研究」(1)」『東京外国語大学論集』8:11-54.
小竹武夫訳(2010)『漢書』東京:筑摩書房.
清瀬三郎矩府(1998)「日本語の母音組織と古代音の音価推定」『言語研究』96:23-42
栗林均(2003a)「『元朝秘史』におけるモンゴル語と漢語の人称代名詞の対応」東北アジア研究 7:1-32.
栗林均(2003b)『華夷訳語 (甲種本)モンゴル語全単語・語尾索引』仙台:東北大学東北アジア研究センター.
黒板勝美(1973)『日本書紀』国史大系編集會 東京:吉川弘文館.
佐伯有清(1983)『新撰姓氏録の研究』東京:吉川弘文館.
早乙女雅博(2005)「高句麗の歴史」『高句麗壁画古墳』60-64 東京:共同通信社.
坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校(1974)『日本書紀』日本古典文学大系 67・68 東京:岩波書店.
白鳥庫吉(1942)『音訳蒙文元朝秘史』東京:東洋文庫.
白鳥庫吉(1970)『白鳥庫吉全集』第三卷 東京:岩波書店.
武田幸男(1989)『高句麗史と東アジア』東京:岩波書店.
武田幸男(2007)『広開土王との対話』東京:白帝社.
平山久雄(1967)「中古漢語の音韻」『中国文化叢書 言語』1:112-166 東京:大修館書店.
平山久雄(2018)『敦煌《毛詩音》音韻研究』東京:好文出版社.

- 福井玲(2013)『韓国語音韻史の探求』東京:三省堂.
本田済(1968)『漢書・後漢書・三国志列伝選』中国古典文学大系 13 東京:平凡社.
三品彰英遺撰(1975)『三国遺事考証』東京:塙書房刊.
村山七郎(1963)「高句麗語と朝鮮語との関係に関する考察」『朝鮮学報』26:189-198.
森博達(1991)『古代の音韻と日本書紀の成立』東京:大修館書店.
森博達(1999)『日本書紀の謎を解く:述作者は誰か』東京:中央公論新社.

(2)韓国語で書かれたもの

- 趙炳舜(1984)『増修補註三国史記』ソウル:誠庵古書博物館.
李基文(2004)『国語史概説』ソウル:태학사.
李基文(1991)『国語語彙史研究』ソウル:東亜出版社.
李丙壽(1977)『國譯三國史記』과주:한국학술정보.
李丙壽(2012)『訳注三国遺事』과주:한국학술정보.
梁紅梅(2019)「『三国史記』高句麗紀에 적힌 고구려 인명의 한자음에 관하여」(日本語訳「『三国史記』高句麗紀の中の高句麗人名の漢字音について」)『第二屆新世代韓國學研究者國際學術會議論文集:東亜韓國學』:台灣.
俞昌均(1991)『삼국시대의 漢字音』ソウル:民音社.

(3)中国語で書かれたもの

- 郭錫良(2017)『漢字古音手冊』増訂本 北京:商務印書館.
集安市博物館編著(2013)『集安高句麗碑』吉林:吉林大学出版社.
王力(2003)『漢語音韻』北京:中華書局.
王力(2012)『漢語史稿』北京:中華書局.
王力(2017)『漢語語音史』王力全集第二卷 北京:中華書局.
鄭張尚芳(2003)『上古音系』中国当代語言學叢書 上海:上海教育出版社.
周祖謨(1960)『廣韻校本』北京:中華書局.
周祖謨(1980)『廣韻四声韻字今音表』北京:中華書局.

Study of the Name of the Goguryeo King Jumong

Hongmei LIANG
(University of Tokyo)

This paper summarises the different Chinese characters used in all the relevant historical sources for King Jumong's name, and analyses the characteristics of their phonology and meaning.

There are many variations in the Chinese characters used in King Jumong's name, with the first syllable of his name being 鄒、都、騶、仲、中、須, and the second and third syllables being 牟、蒙、慕、牟祁. Most of the initial consonants are voiceless(仲 is voiced) and unaspirated, and the use of the main vowel /-u/ in the second syllable are same. The characters 騶 in the *Book of the Han* and 鄒牟 in the "Inscription of King Gwanggaeto" were pronounced close to /ʃʷiu miǝu/ or /ʃʷiu mu/ in the contemporary Koguryo language.

Although 象解 is not related to the 朱蒙 series in terms of phonological features, it can be interpreted as a lexeme with ideographic meaning because of the use of 解 in the names of the early kings of the Buyeo and Koguryo kingdoms and its close pronunciation to the Korean word /hai/ 'sun'.

This paper focuses on the similarity of the homonym Jumong with the Mongolian word *sumu* 速木 'arrow', and reconstructs the origin of the word accordingly.

(りょう・こうばい tiao zhan25@hotmail.com)